

## アントニーの《没落》と《運命》

朱雀成子

### 序

アントニーには、クレオパトラとの《愛》の世界と、シーザーとの《名誉》の世界がある。《名誉》の世界に注目すると、そこにはアントニーがシーザーに敗北していく過程が描かれている。シーザーはアントニーの死後

...that our stars,  
Unreconcilable, should divide  
Our equalness to this. (V. i. 46-48)<sup>(1)</sup>

と、自分達の星が和して並べぬ宿命でそのために破局を招いたと述べている。二人の性格は相入れず、シーザーも言うように「末永くいつまでも友好を保ってゆける間柄ではない」<sup>(2)</sup> (“for’t cannot be/We shall remain in friendship,”) (II. ii. 112-113) のであり、三頭政治崩壊後はどちらかが滅びる運命である。そして《没落》への道をたどるのはアントニーの方である。アントニーはなぜシーザーに敗北したのであろうか。アントニーの敗因を登場人物をはじめ多くの批評家は、アントニーの情欲とクレオパトラの抗しがたい魅力と解釈している。即ちクレオパトラとの愛に沈溺したことが、没落の主要な原因というのである。しかしシェイクスピアはそのように描いてはいない。シェイクスピアは、クレオパトラに関係なく、アントニーはシーザーに負ける宿命だということを占い師に語らせており、アントニーの《没落》を彼の《運命》として描いている。この作品は「不運な星のもとに生れた恋人たち」 (“star-crossed lovers”) の『ロミオとジュリエット』

(1) 以下引用は M.R. Ridley 編のアーデン版による。

(2) 以下翻訳の引用は福田恒存の訳を引用。

ト』以上に運命的な色彩が濃厚である。例えば《運命》(“fortune”), 又は《運命の女神》(“Fortune”), 宿命(“Fate”)という運命に関する語は全部で44回も使用されており、これは《愛》(“love”)や《名誉》(“honour”), 《世界》(“world”)などという語と同様、頻繁に使用されている<sup>(3)</sup>。この作品の背後には《運命の車輪》(“Fortune’s wheel”)の音が断えず鳴り響いている。シェイクスピアは、《運命の車輪》の頂点にいたアントニーが車輪の最下位まで《没落》していく過程を、『ロミオとジュリエット』の単純明快な公式ではなく、様々の要素を絡ませて複雑に展開していると言えよう。

本稿では、「かって世界の半ばと戯れ、心のままにその運命を左右した」(“With half the bulk o’the world play’d as I pleas’d,/Making and marring fortunes.”) (III. xi. 64-65) ほどのマルスのようなアントニーが、どのようにして《没落》していくかを《運命》と関連づけて考察しよう。

## I

劇の冒頭におけるアントニーの姿は、《運命の車輪》の頂点に登りつめた感がある。彼はローマを離れてクレオパトラとの愛に没溺しながらも、なお三頭政治の第一人者として他の二人に頼られる存在である。彼はシーザーを恐れることもなく、その使者を無視するが、シーザーの方ではポンペイの勢力増大に際して、アントニーの帰国を一日千秋の思いで待っており、二人の力の相違が我々に明示される。ポンペイも、アントニーはシーザーとレピダスを二人合わせたより倍の力を持っていると評している。彼

(3) 《愛》(“love”)は43回、《名誉》(“honour”)は20回、《世界》(“world”)は42回使用されている。又、黒瀬保氏の『運命の女神』(1970年、南雲堂)によれば、中世以来、軍神マルスや愛の女神ヴィーナスの神性は《運命の女神》と混同されており、シェイクスピアがアントニーやクレオパトラをマルスやヴィーナスに譬えたのも何か《運命》との関連を感じさせる。また運命の関連語として「偶然」(“chance”)が7回使用され、運命の戯れを表す「さいころ」(“dice”) (II. iii. 33) や「撞球戯」(“billiards”) (II.v.3) の語が使われているのも興味深い。

は「マルス」(“Mars,”) (III.v), 「ヘラクレスの後裔」(“Herculean Roman,”) (I. iii) 「この世のアトラス」(“The demi-Atlas of this earth”) (I.v) という名の通り、半神的イメージが濃く<sup>(4)</sup>、まさに「心のままにその運命を左右した」感がある。彼が「これほど想い想われた二つの魂が、このような二人の男女がこうして抱きあえるなら、もうそれだけでよい、おれは世間の奴ばらに有無を言わず認めさせてやる、それだけで二人は眉をあげ、無類の仕合せ者と言いきれるのだと。」(…when such a mutual pair,/And such a twain can do’t, in which I bind,/On pain of punishment, the world to weet/ We stand up peerless.) (I. i. 37-40) と言ってクレオパトラを抱く時、彼は栄華を極め、これ以上は登りようのない《運命の車輪》の頂点にいる。したがって、この後には彼の《運命》は下降するしかないわけで、この状況はオセローがデズデモーナと嵐の後サイプラス島で再会し、「いっそ死ぬるのなら今が一番幸福な時かも知れん。何というか、較べようのない程心が充ち足りて、もうこれ程の満足は、覚束ない将来にも、二度と来ないのではないかという気がするよ。」<sup>(5)</sup> (If it were to die,/’Twere now to be most happy, for I fear/My soul hath her content so absolute,/That not another comfort, like to this/Succeeds in unknown fate.) (*Othello*, II. i. 189-193) というセリフの後、やがてイアーゴからデズデモーナの不貞を吹き込まれ、幸福の絶頂から破滅への道を行んでいく経過に類似している。アントニーとクレオパトラの悲劇的な結末は、占い師とクレオパトラの侍女たちとの喜劇的な場面の中で暗示される。占い師がチャーミアンの運命を占った言葉、「今日まで眺め暮しておいでになった輝かしい歲月、それにくらべれば、未来は御運が翳りましょう」(“You have seen and prov’d a fairer former fortune/Than that which is to approach.”) (I. ii. 33-34) は、この劇の進行を暗示している。この時、占い師はアントニーの《運命》には何も言及しないが、アントニーがローマへ帰国した際、彼の

(4) ファイロなどのローマ人からは「娼婦お抱えの阿呆」(“a strumpet’s fool”) (I.i. 13) などと言われているが、それでもなおこのあたりは半神的イメージが濃い。

(5) 訳は木下順二訳『オセロー』による。

《運命》を初めて占う。

*Ant.* Whose fortunes shall rise higher, Caesar's or mine?

*Sooth.* Caesar's.

Therefore, O Antony, stay not by his side:

Thy demon, that thy spirit which keeps thee, is

Noble, courageous, high, unmatchable,

where Caesar's is not. But, near him, thy angel

Becomes afeard; as being o'erpower'd therefore

Make space enough between you. (II. iii. 15-22)

とシーザーの運の方が強いので彼を避けるように忠告する。アントニーはそれを認めたくないのか「もうよい、二度とそれを言うな」(“Speak this no more.”) (II. iii. 22) とさえぎる。が、占い師はこのことは決して他言しないと誓いながらも、シーザーは「自然の運」(“that natural luck”) (II. iii. 25) に乗じて必ずアントニーに勝つと述べる。また占い師は二度も「アントニーの守護神はシーザーを恐れている」(“But, near him, thy angel/Becomes afeard; as being o'erpower'd,”) (II. iii. 20-21) (“...thy spirit/Is all afraid to govern thee near him;”) (II. iii. 27-28) と述べるが、これはアントニーにとっては非常にショックだったのではなからうか。それまでは気にもとめていなかったと思われるが、さいころや、くじなどの勝負事をすると、技では上手のアントニーがいつも運で負けることから、確かに自分の《運命》はシーザーのそれより弱いかもしれないと納得する<sup>(6)</sup>。だから占い師の忠告に従ってエジプトに戻る決心がすぐにつくのである。

I will to Egypt:

And though I make this marriage for my peace,

I' the east my pleasure lies. (II. iii. 37-39)

この時アントニーはシーザーの姉のオクティヴィアと婚約しており、婚約を解消することも可能であろうが、自己の政治生命の安泰のためと信じて

(6) Be it art or hap,/He hath spoken true. (II.iii. 31-3)



の行動はシーザーからの逃避と解釈できないだろうか。アントニーの守護神がシーザーを恐れているという占い師の言葉が作用して、シーザーと一人対決することに《恐れ》が生じたとみなされよう。そこで初めの計画通り、クレオパトラのもとへ戻ったというわけである。彼がシーザーを避け、クレオパトラのもとに戻ってきたことは、彼が《名誉》よりむしろ《愛》に生き、《愛》の世界に逃避しようとしたと言える。

しかし、アントニーがシーザーに正面きって戦いをしかけずエジプトへ行ってしまったことで、アントニーの《運命》はここで大きく変化する。即ち《運命の車輪》の頂点にいたアントニーはこれから車輪の下降面に位置することになり、彼の《運命》はこれを期に徐々に傾いていくことになる。

## II

再びクレオパトラのもとに戻ってきたアントニーは、それまでのアントニーとは対照的である。以前エジプトにいた時のアントニーは、クレオパトラと《愛》の世界に沈溺していたとはいえ、エジプトの征服者としての威厳があった。だが、シーザーを避けてエジプトに戻ってきた彼には「運命を心のままに左右した」あの溺れるような自信は見られない。彼はまさにクレオパトラと一体になろうとするかのように、彼女や子供に国々を与え、「彼の統治権」(“his potent regiment”) (III.vi. 95) まで譲ってしまう。これはリア王が犯したと同じ重大な過失であり、このことによって彼の主体性はますます失われていく。

しかし彼はクレオパトラとの《愛》の世界にだけ生きることは許されない。オクティヴィアを置いてきたことで、かえってシーザーとの仲も険悪になり、シーザーの方がエジプトに攻めてきたのである。この戦争ではクレオパトラが「王国の主」(“the president of my kingdom”) (III.vii. 17) として主導権を握り、宣戦布告もアントニーではなくクレオパトラに対してなされ、戦争経費もクレオパトラが出している。アントニーはアテネで

は前述のようにシーザーと一人対決するのを回避したが、今度はクレオパトラと二人で、諸国の王も戦いに駆り出し闘うつもりである。イノバーバスはクレオパトラが出陣するのに反対だが、アントニーは彼女と共に行動することに、安心と喜びを見いだしているようですらある。しかも彼は的確な判断力が欠如している証拠に、誰がみても不利な海戦でシーザーと決着をつけようとする。勿論これにも「海上に。そのほかにどうなさろうと」(“By sea, what else?”)(III.vii. 28)という彼女の意向が反映していることはいまでもない。アクティウムの海戦はシーザーが「身方の興廃はこの一挙に懸っているのだ」(“...our fortune lies/Upon this jump.”)(III. viii. 5-6)と言うように、シーザーとアントニーの天下分け目の決戦である。アントニーがこのような戦いの最中に逃げたのは、彼自身が言うように、愛するクレオパトラが逃げたからというごく単純な動機だけとは思えない。前述のように彼にはシーザーへの《恐れ》があった。心を預けたクレオパトラに逃げられ愕然とした彼にあの時の《恐れ》が蘇ってきたのではなからうか。彼はアテネの時と同様、一人でシーザーに対決できなかったのである。

結局、占い師の予言通り、アントニーは敗戦しシーザーを「運命の支配者」(“Lord of his fortunes”)(III.xii. 11)と呼んで命乞いをする。がそれも拒否され、彼はついにシーザーに一騎打を挑む。運ではシーザーに弱くても、技では彼の方が上手であり、一対一で戦うことで自分の《没落》に歯止めをかけられるとでも考えたのであろうか。しかし彼の戦いへの意欲も時期を逸しては滑稽であり、イノバーバスも言うように「人間の分別というやつも運の支配は免れない」(“I see men’s judgements are/A parcel of their fortunes,)(III. xiii. 31-32)と言える。シーザーはアントニーより「運は20倍も強い」(“being twenty times of better fortune,”) (IV. ii. 3) と思っているので、勿論、アントニーの挑戦を嘲笑する。

*Caesar... (He) dares me to personal combat.*

*Caesar to Antony: let the old ruffian know,*

*I have many other ways to die; meantime*

Laugh at his challenge. (IV. i. 3-6)

我々はこの言葉に、年も取り《運命の車輪》の下降面にいるアントニーに比較して、「今を盛りの薔薇の若さ」(“the rose/Of youth upon him”) (III. xiii. 20-21), 「堂々たる大軍を率いたシーザー」 (“High-battled Caesar”) (III. xiii.29), 「満たされたシーザー」 (“the full Caesar”) (III. xiii. 35) という言葉に象徴されるように、日の出の勢いで車輪の頂点に登らんとしているシーザーの余裕を読みとれる。

しかもクレオパトラがシーザーの使者に手にキスを許したことで、アントニーは《名誉》の世界のみならず愛の世界でも敗北し、まさに《没落》への道を歩んでいることを悟る。

Alack, our terrene moon

Is now eclips'd, and it portends alone

The fall of Antony! (III.xiii. 153-155)

ここで彼が取った態度はどのようなものであろうか。彼はクレオパトラと仲直りの後「勇気」 (“heart”) (III. xiii, 172) を振り絞り、「少しの望み」 (“There's hope in't yet.”) (III. xiii. 176) に賭けてシーザーと運を決しようとする。

I will oppose his fate. (III.xiii.169)

しかし今や車輪の最下位へ、即ち《没落》へと歩んでいる自分の《運命》と遮二無二戦おう<sup>(8)</sup>とする彼の意気込みも、シーザー側のみならず、身方のイノバースにさえも、「錯乱」 (“distraction”) (IV.i.9) としか映らない。しかし判断力が欠如しているアントニーにも、自分の《運命》がある程度読めているようである。彼は最後の戦いの前夜、「おそらく二度とおれの顔を見ることはあるまい。いや、あっても、それは傷だらけの亡霊に違いない。」 (“Haply you shall not see me more, or if,/A mangled shadow.”) (IV. ii. 26-27) と一同に悲壮にも語っている。彼にはシーザーに敗北するかもしれないという予感があり、「煩いごとは(酒に)溺らせてし

(8) *Ant.* The next time I do fight / I'll make death love me; for I will contend/Even with his pestilent scythe. (III.xiii. 192-194)



---

まう」(“drown consideration”) (IV. ii. 45) しかないのである。

アントニーの《没落》は客観的にも、地下から聞こえる不思議な音楽によって暗示されている。これは「アントニーの好きなハーキュリーズが、今あの人を去るところなのだ」(“’Tis the god Hercules, whom Antony lov’d, / Now leaves him.”) (IV. iii. 15-16) という兵士の言葉にあるように、アントニーの武運もいよいよ尽きようとしていることを意味するのであろう。アントニーも「もし今日の戦いで運命がこちらの身方についてくれぬとなれば、もともとこちらがそれに逆らっているからだ」(“If fortune be not ours to-day, it is / Because we brave her.”) (IV. iv. 4-5) と《運命》に抵抗することの無意味を悟っている。

幸いにも戦いの第一日目はアントニーの勝利に終るが、彼の喜びよりは予感が悪かっただけに度外れており、熱に浮かされた感がある。<sup>(9)</sup>「こうして黒髪に白いものが混ってきたとはいえ、このとおり脳味噌がある以上、まだまだ体力を養い若い者と互角に勝敗を争うこともできる」(“though grey / Do something mingle with our younger brown, yet ha’we / A brain that nourishes our nerves, and can / Get goal for goal of youth.”) (IV. viii. 19-22) と彼が言うとき、今や《運命の車輪》の頂点に登ろうとしているシーザーに一矢を報いたことへの喜びが感じられ、我々はアントニーの強さを感じるより、年もいくらかとった彼に憐憫さえ覚えるのである。

二日目の戦いではアントニーはついにシーザーに敗れる。アントニーは敗戦の理由をすべてクレオパトラの裏切りのせいにするが、彼の考えはおかしい。第一日目には勝ったとしても、二日目に勝利を得るとは限らない。一晚経てば双方とも情勢が変化し得る。次のスケアラスの言葉「燕がクレオパトラの帆に巣を掛けた。占師は知らぬ、訳が解らぬという、顔を曇らせて、知ってはいてもあえて語らぬつもりらしい。」(“Swallows have built / In Cleopatra’s sails their nests. The augurers / Say, they know not, they cannot tell, look grimly, / And dare not speak their knowledge.”) (IV. xii. 3-

---

(9) 第4幕第8場の総数39行のうち、クレオパトラのセリフはわずか4行で残りはすべて勝利を有頂点に喜ぶアントニーのセリフである。

6) は、アントニーの運の終りを暗示する客観的な裏付けとなろう。この時のアントニーの心理状態は

Antony

Is valiant, and dejected, and by starts

His fretted fortunes give him hope and fear

Of what he has, and has not. (IV.xii. 6-9)

で、アントニー自身、「転変極まりない運命」(“His fretted fortunes) (IV. xii. 8) に動揺していたのである。従って、この時の敗戦にクレオパトラは何ら関係はない。この事は《運命の女神》の性格を考えると更に納得できる。中世以来《運命の女神》は気紛れで、人間を喜びから突然悲哀に陥れると考えられていた。禍福交代の寓意は主にシェイクスピアの史劇に頻用されているが、この時のアントニーにはそれが端的に一日で具現されたと解釈できる。即ち勝利を得たと大喜びさせていて突然、敗北をもたらしたのである。この時のアントニーには「運命の女神はどん底に投げ落とすために持ち上げます」(“She (Fortune) hoyseth vp to hurle the deeper doun.”) (*The misfortunes of Arthur*, V.i. 12) <sup>(10)</sup> という言葉がぴったり当てはまる。アントニーがまさに《没落》せんとする時、東の間の閃光の様に、彼は昔のあの強さを発揮し得たのであろう。だが結局は予言通りシーザーの運が強く、最終的には彼が勝利を得たのである。アントニーは自分の運の終りを悟って次のように述べる。

Fortune and Antony part here, even here

Do we shake hands. All come to this? (IV.xii. 19-20)

今や世界はシーザー一人のものとなり、占い師の言葉は実現されたのである。

(10) 黒瀬 保『運命の女神』(1970年 南雲堂) p.73参照。

(11) ...there is left us / Ourselves to end ourselves. (IV. xiv. 21-22)

### III

アントニーの自殺は今や時間の問題である。彼は死を目前に控え<sup>11)</sup>、  
万物は移ろうことを悟る。

Eros, thou yet behold'st me?

.....

...here I am Antony,

Yet cannot hold this visible shape, my knave. (IV. xiv.1-14)

第一行の *me* はまだ「シーザーに敗北していない時の自分」を指し、彼はエロスに今のみじめな姿でなく、昔の自分を見い出してくれているかどうかと尋ねている。しかし雲の形が刻々と変化するように、アントニーも変わらざるを得ないわけで、十三行から十四行は《運命の車輪》の考え方を感じさせる。彼の「昔の栄華」(“my former fortunes”) (IV. xv.53) と現在の「みじめな末路」(“The miserable change”) (IV. xv. 51) はコントラストをなし、まさに平家物語の「絵巻物」(“pageants”) (IV. xiv. 8) を見るようである。アントニーは、自己の栄華から《没落》の過程を、まさに「絵巻物」を見るように冷静に受け止めている。彼はクレオパトラの自殺が狂言だったことを知らされても、不思議なほど怒らない。ただ彼女の安全と名誉だけを心配している。彼はここに至って《運命》に抵抗せず、すべてを堂々と受け入れようとしている。アントニーの《運命の女神》に対する言葉

...do not please sharp fate

To grace it with your sorrows: bid that welcome

Which comes to punish us, and we punish it

Seeming to bear it lightly. (IV. xiv. 135-138)

は、アントニーの死を目前に控えたクレオパトラの《運命の女神》に対する呪いの言葉

*Cleo.* No, let me speak, and let me rail so high,

That the false huswife Fortune break her wheel,  
Provok'd by my offence. (IV. xv. 43-45)

と対照的である。アントニーの最期の心境は、「雀一羽落ちるにも、神の特別な思召しがある」(“There is special providence in the fall of a sparrow.”) (*Hamlet*, v.ii. 217-218) と述べたハムレットの諦観にも似た心境ではなかったろうか。